様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 15 日現在

研究種目：若手研究(スタートアップ)
研究期間：2007～2008
課題番号：19830117
研究課題名（和文）　米国大学の社会貢献に関する史的研究

研究課題名（英文）History of Outreach and Public Service of Universities in the United States

研究代表者
五島　敦子(GOSHIMA ATSUKO)
南山短期大学・英語科・准教授
研究者番号：50442223

研究成果の概要:第一に、米国の大学における社会貢献理念の生成過程を明らかにするために、ウィスコンシン大学を事例として、1890～1910 年代のアメリカ大学拡張運動を分析した。第二に、今日的な社会貢献の一形態である産学官連携組織の形成過程を、Wisconsin Alumni Research Foundation が推進する Wisconsin　Institutes for Discovery の設立計画を中心に解明した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	700,000	0	700,000
2008 年度	360,000	108,000	468,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,060,000	108,000	1,168,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：大学開放/大学拡張/生涯学習/社会教育/アメリカ大学史/アメリカ成人教育史/高等教育 /産学官連携

１．研究開始当初の背景

先行研究の検討から、アメリカ大学拡張史研究では、以下の三つ課題が明らかとなった。

(1)高等教育の視点の欠落

第一の課題は、社会貢献という概念が社会的・市場的ニーズに敏感なアメリカ高等教育の形成過程で醸成されたことが見落とされてきたことである。欠落の理由は、大学拡張研究が、従来、社会教育・生涯学習領域で取り組まれ、成人教育史上の意義が強調されてきたからである。そもそも州立大学の場合、州税によるサポートへの対価として、州民のニーズがある限り、大学に蓄積されたすべての資源をもってニーズに応える義務を負う。大学にとって、社会貢献は、単なる奉仕ではなく、大学みずからの存在意義を証明するための必須の使命なのである。こうした視点か

ら、すでに研究代表者は、大学による社会貢献活動の歴史的意義を、制度史・思想史の両面から解明する事例研究を重ねてきた。しかし、精緻な歴史像を描くには、実際の事業に携わった人々に関わる事例研究が必要と考えられた。

(2)一次史料の欠落

第二の課題は、第一次史料にもとづく研究の不足である。マージナルな部分に光をあてて大学組織の構造を逆照射するという手法は、アメリカ大学史のジェンダー研究で実績があるが、大学拡張史研究も、その視点に学び、大学と社会との接点としての大学拡張部の意義を検討する必要がある。大学「本体」組織の発展過程を視野におさめて大学拡張を分析する作業は、西洋高等教育史研究の最前線として望まれている作業である。

(3)歴史的考察の今日的意義

第三の課題は、歴史的考察が欠けてきたために、今日的活動に対する理解が不十分なことである。日本では、2005 年１月中央教育審議会答申『我が国の高等教育の将来像』で、「社会貢献」が「第三の使命」であると示された。けれども、概念規定が不明瞭であるために、社会連携・大学開放の組織運営に整合性が欠けているとされる。米国の社会連携は、国公立大学法人化以降、競争的資金獲得施策のモデルとして注目されるが、今日的な動向研究が中心である。これに対し、歴史的経緯を学ぶことで、日米の根源的な異同が明らかとなり、日本独自の社会貢献概念の形成に資することが期待される。

２．研究の目的

(1)大学拡張部設立過程の解明

以上の先行研究の到達点に鑑み、本研究は、大学の社会貢献とは何かを明らかにするために大学拡張(University Extension：大学開放)の歴史像を分析することを目的とした。

社会貢献が、教育・研究と並ぶ「第三の使命」と明言されたのは、20 世紀初頭米国においてである。ウィスコンシン大学は、その使命を果たすために、大学拡張部を開設した。大学拡張部は、公開講座だけでなく、産業振興や公共事業にも着手し、地域社会の発展に寄与した。近年日本で注目される産学官連携は、同大学が先駆的モデルのひとつである。本研究の狙いは、この大学拡張事業を推進した人々に焦点をあてることにより、社会貢献概念の本源的な意味を解明することにある。

(2)研究対象－マネージメントへの注目

具体的な研究対象を、大学拡張部の実務を担当した専門教職員に絞り、彼らの思想と活動の分析を対象とした。とくに焦点をあてるのは、大学拡張部のマネージメントを担った専任教職員である。

高等教育研究において、マネージメント領域は、近年、関心がもたれている分野であるが、歴史研究は、緒についたばかりである。それゆえ、社会との接点であった彼らが、いかなる大学観をもち、社会貢献をどのようにとらえていたかを明らかにすることは、社会貢献概念の重層的な構造を読み解くために必要な作業となる。社会連携の専門教職員の役割を探求することは、今後日本が必要とする事業担当者の専門性を規定していくうえでも有益である。

(3)今日的な展開の継承

社会貢献理念の多様性と重層的な構造を明らかにするために、1920 年代に登場した非営利産学連携組 Wisconsin Alumni Research Foundation (WARF)が着手している新しい産学官連携組織 Wisconsin Institutes for

Discovery（WID）の設立計画に焦点をあて、ウィスコンシン・アイディアとして知られる社会貢献理念が、どのように継承されているかを明らかにすることとした。

３．研究の方法

(1) デジタル・データベース調査

デジタル・データベースと国内図書館所蔵マイクロフィルム等を活用し、国内での基礎調査を行った。

(2)海外調査

大学拡張部の資料は、大学アーカイブス、農学部、州歴史協会、州立図書館等に分散しているので、現地で研究補助を依頼して史資料を収集した。史料は、ライティ文書（州歴史協会）、大学拡張部事業記録（ウィスコンシン大学スティーンボック記念図書館）などを利用した。そのほかに、現地の大学アーカイビスト、大学拡張史研究者らとの意見交換を行った。

４．研究成果

(1)平成 19 年度

ウィスコンシン大学を主たる事例として、史料の収集と分析を行った。国内では、『マッカーシー文書』『ヴァンハイズ文書』『ウィスコンシン歴史雑誌』（立教大学・同志社大学所蔵）などを活用して、史料の整理と予備調査を行った。海外では、ウィスコンシン州とオハイオ州で調査を実施した。ウィスコンシン州では、大学アーカイブスおよび州歴史協会などで、当事の実態を示す一次文献と写真を入手するとともに、大学拡張史研究者ジョンソン氏およびウィスコンシン大学教育学部准教授と大学拡張史研究の史料保存のあり方にういて意見交換を行った。

史料の分析の結果、大学拡張部のマネージメントを担ったレイバーとライティという拡張事業の専門職が、思想や立場の相違を乗り越えて協調することで、大学による社会貢献活動を地域に浸透させていった経緯が明らかとなった。

(2)平成 20 年度

①ウィスコンシン大学拡張部の生成と展開の歴史像研究

第一の成果は、これまでの研究成果をまとめ、平成 19 年度に収集した写真と史料を所収して、単行書を刊行した。社会貢献を実行するためには、大学のビジョンを担う学長、事業化のシステムを担った教授陣に加えて、システムを運用するマネージメントが必要であり、それらをつなぐ専門職が、あるべき社会貢献の具体像を形成していったことを明らかにした。大学の社会貢献理念とは、既存の知識や技術を提供するだけではなく、社会の埋もれた課題を発見し、社会的な営みや人間関係を取り込みながら、大学の専門的知見によってそれらの課題を解決することである。このような大学と社会の相互の働きかけが、大学自身に多様性と柔軟性をもたらし、アメリカ高等教育を豊かに発展させてきたことが明らかとなった。

②今日における産官学連携組織の形成過程の解明

第二の成果として、社会貢献の一形態として産学官連携組織の形成過程を、WARF が推進する WID の設立計画を中心に解明した。WID は、バイオテクノロジー分野において、大学と民間研究機関の共同で創造的な研究シーズを生み出す組織であるが、公共空間を形成して最先端の研究成果を地域住民に開放することをめざしている。分析により、ウィスコンシン・アイディアとして知られる社会貢

献理念を、産学官連携という今日的営みに継承し、生涯学習を推進する構想が明らかとなった。WID の本格的な活動開始は 2010 年以降のため、今後の展開を追跡調査するとともに、設立母体である WARF の歴史的役割について研究を深める必要性が明らかとなった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①五島敦子「アメリカにおける産学連携組織と生涯学習―Wisconsin Institutes for Discoveryを事例として」『南山短期大学紀要』第 36 号、1－19、2008 年、査読無。

②五島敦子「大学拡張部における専門職の意義―L.E.レイバーとW.H.ライティを中心に」全日本大学開放推進機構『大学開放フォーラム』創刊号、45-55、2008 年、査読有。

〔学会発表〕（計 2 件）

①五島敦子「アメリカにおける産学連携組織形成の背景―ウィスコンシン大学を中心に」中部教育学会第57回大会、2008年6月28日、中部大学。

②五島敦子「大学における公共空間形成の試み―Wisconsin Institutes for Discoveryを事例として」日本社会教育学会第 55 回大会、2008 年 9 月 20 日、和歌山大学。

〔図書〕（計 1 件）

①五島敦子『アメリカの大学開放 ―ウィスコンシン大学拡張部の生成と展開』学術出版会（日本図書センター発売）、224、2008 年。

〔その他〕

五島敦子研究業績一覧

http://www.ml.mediacat.ne.jp/~agoshima/profile2.html

南山短期大学紀要第 36 号

http://www.nanzan-tandai.ac.jp/kiyou/No.36/14Goshima.indd.pdf

６．研究組織

(1)研究代表者

五島　敦子(GOSHIMA ATSUKO)

南山短期大学・英語科・准教授

研究者番号： 50442223

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし